

基調講演・PD のまとめ

基調講演・果たして若者は教会離れをしているのか・日本教会への提言

溝部司教

I. 日本教会の現状

- ・元気がない。若者が少ない。召命も少ない。教会に来る高齢者も少なくなっている。
- ・修道会は高齢化がすすんでいる。若い会員が高齢者の世話のために入っているのか？

II. キリシタン時代の信仰と霊性

- ・キリシタン時代の迫害は想像を絶するものがあった。
- ・そんな中でキリシタンたちは「祈り」「信心」のグループを作り、霊性を深めた。
 - ・これが「組」となり、この組は霊性、祈りを中心としたグループであり、それは同時に善行のグループでもあった。
 - ・霊操は司祭、修道者の為の者であったが、信者も信者用にアレンジしたものを修得し実践していた。「キリストに倣う」など。
 - ・信者たちはキリストの神秘を黙想し、キリストと出会っていたので、「喜び」があった。
 - ・多くのキリスト者が生まれた。
- ・司祭たちは「組み」の所を回った
 - ・信者たちが自分たちで「組み」を作り、司祭たちを受け入れ、かくまい、導いた。

III. 時代を越えて人を養うもの

- ①祈りと観想（み言葉の味わい）・キリストとの深い出会い
- ②共同体づくり・食卓は重要である・

IV. 望洋庵の試み・（祈り・ミサ・食事など基本は譲らない、残りは自由）

- ・敷居を低くしている・誰でも、素直に来れるように
- ・ゼロから作る・創造性を大切にする・柔軟性、謙遜を
 - ・古い物置場を頂き、そこを庵として改造。
- ・「祈りの場」・静寂さを保つように・
- ・食卓を大切にする・
 - ・自分たちで食事を作る・上げ膳、据え膳はしない・
 - ・食卓を乱す会話（否定的、批判的、下品な会話）に対して注意する。
 - ・食卓に出ない、引き隠るとき「召命の危機」（しるし）となる。
- ・ミサを大切にする
 - ・み言葉を読んで、毎回、分かち合う。
- ・夜にはローソクをともし、一日をゆっくり反省する・ゆるしの秘跡に導く・スムーズに与る。
 - ・自分の内面を見つめ、
 - ・分かち合いを通して、他人を聴き、視野を広げる。
- ・広報・フェイスブックによって広まり、それを見た人が来る・facebook もいいものだ。
- ・レクチオ・ディヴィナ
 - ・福音書を共に読み、ポイントを解説し、黙想させ、その後、分かち合って貰う・良い実りをあげている。

- ・青年主導の黙想会：
 - ・自分たちで企画させる・テーマ、やり方など・自分たちで企画することで成長している。
- ・地元との協働
 - ・京都教区の司祭たちが協力してくれる
 - ・嫌われることはしない・続かない・
- ・ボランティア養成・海外ボランティアのための養成・タイ・カンボジアなどへ
- ・ラテン語ミサ・同志社大学の学生とのコラボレーション

基調講演・現実的に召命の土壌はどうなっているか。

池長潤大司教

はじめに

- ・現代社会の事情・キリスト教にとって向かい風・キリスト教の教えを生きられない現実
 - ・カトリックの輝きを失わせるものがある。
- ・しかし「カトリック教会は輝く」
 - ・貧しい国、戦争ある国、被災地などでの奉仕
 - ・豊かな国においても、貧しい人たちへの配食などで
 - ・国のあり方（政策）への提言など

I. 科学の時代

- ・科学技術庁の白書・1962年・
 - ・日本の国を豊にする為に、教育に力を入れる。・専門知識を持つ人を育成
 - ・高い学力ー良い会社就職ー良い製品ー競争に勝つー豊になる・という図式
 - ↓
 - ・経済大国になった。
- ・経済的豊かさのために
 - ・人間の心の成長、成熟が軽視された・欲をかき立てたから・
 - ・精神的価値は軽視、無視された・自死者が多い国・
 - ・日本人が本来持っていた、誠実・丁寧・精密・気づかい・やさしさなどが希薄化

II. 精神・宗教的価値の軽視

- ・現代の「豊かさ」「自由」重視の政策のために・
- ・教会に行く人が少なくなっている・教会は高齢化のために、未来に暗雲が立ちこめる
- ・キリスト者の召命は希薄化・修道会は高齢化・学校、病院、福祉施設の譲渡が進んでいる。

III. 召命の土壌をどう作るか

A. 認識・価値観の大転換が不可欠

- ・近代以降の人間中心の世界観、人間観から、神の元にある人間観への回帰が不可欠
 - ・神から離れることの結果を今感じている
 - ・所有と競争のために・多くの弱者が犠牲になっている。人権が無視されている。
 - ・神否定は、人間の神化に表裏であることが解ってきた。
 - ・人は自分が「生かされて生きる」ことを自覚するべき。
- ・経済面から：戦後の経済中心の価値観から精神をも考慮し重んじた価値観を展開する
- ・医療面から・医療の進歩は素晴らしい・生命医療は人を利用するのではなく、人に奉仕するべき
- ・ダイナミックな世界
 - ・移り変わりが激しい世界・価値の多様化、多元化・唯一真理への否定の傾向がある
 - ・情報化社会の中で、人は何が本当か解らない・本物に深まらない

B. カトリック教会の底力を生きる

- ・真理を生き、喜び、示し、教える力がある・国の間違いに堂々と発言できるべき。
- ・自他が神に生かされている・自他の肯定・本来性の回復ができる・
- ・他に添う力がある・他を成長させる

C. カトリック家庭の見直し

- ・召命の土壌は家庭
 - ・家庭こそ「愛」を体験し、学ぶ場
 - ・家庭こそ関わり場であり、神との人、人同士の関わりを学ぶ
- ・教会における家庭の養成・子供たちの侍者・小さいときから神に近づける
- ・外国籍の子供を育成する。
- ・

パネル・ディスカッション

マタタ師

I. 第二ヴァチカン公会議後、召命の土壌は変わってきた。

- ・何時の時代も同じ疑問・若者がいない・召命が少ない・
- ・今の時代、これからの時代を展望した養成が必要・
 - ・信者をキリストのように育てること ➡ キリストに生き、キリストを運ぶ信者へ
- ・古い時代のあり方に固執しない・

II. メディアを使った福音宣教

- ・若者はキリストとの出会いを求めている。
- ・教会の手伝いになり出されることではない。
- ・若者のニーズを知り、それに応え得ること・修道会、教会のニーズに合わせるのではない。
- ・若者との関わり
 - ・場所を提供する・共に作業する・共に食事する・共に祈る・

III. 21世紀の司祭

- ・現代は情報化社会・縁を切り、自分の望む人と関わろうとする時代。
 - ・真の出会いが必要とされる時代・世界の中にいながら、地に着いていない時代である。
- ・キリストを感じとらせる司祭が不可欠
 - ・若者との関わりができる司祭・本物の司祭・地の塩となる
- ・祈りの共同体・信頼、連帯、従順、清貧などが教会を浄化し、生きた教会とする。

S r. 中島その枝・召命の土壌と現状打開の為の提言

I. 若者のダイナミズム

- ・若者は新たなことに挑戦し、経験を積み、生きる力と術を体得する
- ・若者は自分が生きること・この世界に・横のつながりの中で・知識を必要とする
- ・若者は種々の困難に出会い、苦の中に投げ込まれ、生の意味をもとめ、関わりを広げる
- ・若者を導く指導者・霊的同伴者が必要となる

II. 母性の重要性

- ・人間が人間として育つため
- ・人間が十全化し、神の似像となるために
- ・人間が召命に生きるため

- ・人間は神の似姿として作られている・母性は救いの土台となる
 - ・女は男から創られた・あばら骨・私の脇・対等、同等の意味
脇腹・神が存在する神殿の柱の意味
 - ・女は「神殿の中心となる柱として作られた」の意味・不可欠的存在・最重要存在
- ・女性性は男性性との関わりで成長する・十全化する。

II. 召命の土壌としての母性性

- ・母性は存在を受容し、包み、守り、育て、成長させる力である。
 - ・母性なくして人は育たない。
- ・召命は母性性を必要とする
 - ・召命に応える人は母性性の中で育ち、母性性を持つ者となって、他を育てる。
- ・キリストの召命は母マリアの母性性によるものである・マリアの存在は重要
- ・教会、共同体で母性性を具体的に生きることが不可欠である。

漆原比呂志・経験と召命

I. 召命とは・神の呼びかけに応える

A. 祈りが重要

B. 体験

- ・若者はあらゆる可能性をもっている・
 - ・被災地ボランティア、海外ボランティアなど
- ・種々の経験を通して、自分の力を知り、自分の生き甲斐を掴む
 - ・種々の苦しみ、孤独、困難、危険に遭遇する
 - ・自分が生き、生かされ、生かしていることを体験する・
 - ・自分の立場、存在を自覚する。
- ・経験は自分の存在の場を堅固にする・
 - ・経験は自分を創る力となり、
 - ・経験は自己の限界を知り、他者の助けを必要とすることを学ぶ。
 - ・経験は他を知る機会となり

C. 分かち合い

- ・神の働きを知る。
 - ・他の中の自分を知る。
 - ・自分の存在の意味を知る。
- ↓
- *これらが召命見つめさせる。

II. 信徒には固有の召命がある。

- ・神が呼びかける場での奉仕にはいろいろある。

III. カトリック教会の底力

- ・被災地支援でみせた団結力と援助の継続力・シスターズ・リレーなど
- ・「共にある」ということを実行する力・これは魅力であるし、召命の芽生えにつながる。